

イマチニブ治療を実施した回盲部原発播種性消化管間質腫瘍 (GIST) の犬の一例

○田中知樹¹⁾ 高橋大助¹⁾ 古田亮¹⁾ 巽貴裕¹⁾ 藤野泰人²⁾ 小笠原良一¹⁾

1) 習志野動物医療センター りょう動物病院 2) 浦安中央動物病院

I はじめに

消化管間質腫瘍(GIST)は、KIT や CD34 を発現するカハール介在細胞を起源とした間葉系細胞腫瘍である。ヒトでは、GIST の 60~70%が胃に発生し、20~30%が小腸であり、大腸は少ない。一方、犬では大腸原発の GIST が全体の 40~50%(うち盲腸が約 70%)とされ、最も多くを占めている。GIST 発生の一因として、KIT 蛋白をコードする *c-kit* 遺伝子の機能獲得性変異が示唆されており、*c-kit* 変異による異常 KIT はリガンド結合がなくてもリン酸化し、恒常的に細胞内シグナル伝達を活性化し、細胞増殖を促進させる。近年では、異常リン酸化を阻害する分子標的薬を用いた GIST 治療が検討されている。

II 症例

ヨークシャテリア、避妊雌、11 歳、体重 3.1kg。2015 年 09 月 22 日、僧帽弁閉鎖不全症の治療検診の際、腹腔内に径 3~4cm 大の腫瘍が認められ、血液検査では肝酵素および cCRP が軽度上昇していた。精査として 10 月 9 日に実施した CT 検査では、盲腸領域に腫瘍病変が認められ、回腸と広範囲に癒着し、肝臓や脾臓とも接触していた。腫瘍の経皮的 FNA 細胞診では、少数のマクロファージとともに異型性を有する紡錘形細胞が認められた。11 月 16 日、腫瘍の外科的切除を実施したところ、回盲部腫瘍を中心として大網に 5mm 程度の結節性病変が認められた。盲腸の前後で腫瘍を切除し、腸の側々吻合を実施した。同時に大網結節病変の一部を切除生検した。病理組織検査から盲腸に発生した GIST および大網への播種病変と診断し、腫瘍の *c-kit* 遺伝子検査では変異が認められた。術後 21 日目より、残存病変に対してメシル酸イマチニブによる抗腫瘍治療を開始した。術後 108 日現在、腫瘍増大や他の転移所見は認められていない。

III 考察

GIST に対する治療は、犬では切除手術が主体とされているが、ヒトではイマチニブによる治療効果が示されている。ヒト GIST の一部では *c-kit* 変異などによる異常 KIT の恒常的リン酸化が認められており、多種キナーゼ阻害薬であるイマチニブにより腫瘍増殖が抑制されることが明らかとなっている。イヌにおいても KIT の恒常的リン酸化を呈する GIST 症例ではイマチニブによる治療効果が期待されるが、イヌ GIST の治療反応性に関する報告は乏しいのが現状である。本症例では、盲腸を中心とした原発病変は腸閉塞を考慮して切除したが、播種病変における腫瘍残存および他器官への転移の可能性を考慮し、イマチニブによる抗腫瘍治療を実施している。今後さらに治療を継続し、長期的に良好な経過が得られれば、イヌ GIST に対するイマチニブの臨床的有用性が示唆される意義深い貴重な症例と成り得る。今後も定期的に精査し、腫瘍増大や転移の有無を含めて注意深く経過観察を行っていく。